

	<p>2013年 9月15日 第98号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会  <a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a>  E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a>  〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	--

# バッタ広場には虫がいっぱい

トンボ池の作業等でバッタ広場の方は中断していました。6月15日に大きくなった木を70cm程の高さに切り詰める作業をしてほぼ2ヶ月ぶりの8月24日、虫調査のためにバッタ広場に踏み入りました。ヌスビトハギやガガイモがたくさん花をつけ、クズが生い茂り2ヶ月前の草地ではない。この季節の植物の成長はほんとうにすごい。植物の丈はそれほどではないもののジャングルのようなヤブ。今はジャングルでも、管理計画の中で冬に広場の半分の面積の植物を根元から刈ることになっています。草地として維持するために2,3年に一度は根元から全部刈ることに決めたためです。

バッタ・キリギリス類の数は一昨年、昨年に比べて個体数がかなり減りました。オンブバッタ5、イナゴの幼虫4、ツチイナゴ2、クダマキモドキ2。ツチイナゴは涙が出ているような目が特徴のイナゴよりかなり大きい虫で(少し季節外れの出現です)クズ等が生い茂ったマント群落を中心とした草丈の高い草原に、クダマキモドキも樹上で生活するとありました。今のバッタ広場はそういう昆虫が生息する環境です。クダマキモドキというからにはクダマキという虫がいるのかな、と伊丹さんに聞かれたので調べました。広辞苑では「管巻」 織機で「ひ」に入れる管に緯糸(よこ糸)を巻き付けること、 鳴く声が糸車を繰る音に似ていることから、クツワムシの異称、とありました。クツワムシは「ガチャガチャ」のことでスズムシのような美声ではありません。図鑑でクツワムシを調べたら、色は茶色と緑色がありますが、クダマキモドキは緑色の



サトクダマキモドキ(左)とツチイナゴ(右)

クツワムシに似ています（鳴き声はクツワムシとは全く似ていない）。

カマキリは、オオカマキリ3、羽のないオオカマキリ（幼虫）2、カマキリの幼虫3、合計8匹でした。

バッタ広場は、2011年2月赤塚公園サービスセンターによって、木も草も全部根元から刈り取られ、更地になってしまいました。その時はがっかりしましたが、その年の夏には、切られた木の根元からひこばえが伸び、夏草が茂ってバッタ広場は復活、イナゴ36匹、オンブバッタ27匹、翌2012年には、イナゴ10匹、オンブバッタ11匹、今年はイナゴ4匹、オンブバッタ5匹。イナゴとオンブバッタの激減は環境の変化でしょうか。カマキリの数には大きな変化はありませんでした。（他のバッタ・キリギリス類については略す）。バッタやイナゴは草原の虫なので、バッタやイナゴが減るのは草原が遷移して草原でなくなりつつあるということですね。



左：ガガイモの花の蜜を吸うコアオハナムグリ 右：ナガコガネの幼虫

コガネムシの仲間では、コアオハナムグリ、マメコガネ、アオドウガネ。アオドウガネはツヤのない緑色をしたコガネムシの仲間、葉も食べるし幼虫は土の中で根を食べる、あちこちで見かけ最近増えているよう。チョウチョでは、キチョウ、アカボシゴマダラ、コムスジ、アゲハ。羽がキラキラしたタマムシが飛んでいました。トンボもたくさん飛んでいましたが、私には見分けがつかない。その他マルカメムシ、サビキコリ、コフキゾウムシ、オオウンモンクチバ、ナガコガネグモ、ツマグロスケバ。ケヤキの巻いた葉にいたアカタテハの幼虫（アカタテハはイラクサ科の植物を食べるのでめずらしい例だそうです）（写真左下）。



草地と言ってもいろいろある。年に数回草が刈られる公園の草地に比べて、バッタ広場には虫がいっぱいです。そして、いよいよ冬になったらバッタ広場の半分の木と草を根元から刈り取り、また草地に戻します（半分だけ刈るのは生き物の居場所を残すため）私達が手を加えることによってそこに生きる虫たちの種類が変わっていく、生き物の世界を支配するのは申し訳ないことですが・・・（坂本 郁子）

# 蓮根第2小学校のビオトープのこと

近くの図書館と隣の小公園には行くが、この小学校に入ったことはなかった。教職課程専攻で自然環境に関心のある女子大生グループの観察会に、8月10日瀬田さんと参加したので、題記のビオトープの概要を紹介します。

ほぼ真四角な敷地の東側に校舎があり、広い芝生の校庭がある。敷地の周囲には色々な樹木が植えてあって、北側の道沿いに西から東に伸びた細長い池がある。池の南側は校庭で開けていて、池の3方はかつての植え込みの樹木が残されているが、水面は非常に日当たりのよいビオトープである。池の広さは当方のトンボ池より小さいが、縁には背の低い野草が繁茂し、水深は10～20cmで赤土の底が見え、池にはアシ、サンカクイ、クサヨシ、ハンゲショウやミソハギなどが生えている。当日も葦を抜いたり折ったりしていたことから、全体にアシなどがはびこらぬよう管理されている。



10年前に単調な樹木だけの校庭に自然を蘇らせるためビオトープを造り、玄関前の花壇も自然の草地に仕立てている。野草は荒川河川地から取り寄せた土と一緒に付いてきたもので、大学生の調査でも生えている草の大ぶぶんが荒川の草と共通だという。池の排水は一段下がった南側を東の方へ向って流していて、縁に柳の中低木が何本か植えてある。

池には最初に放したカントウメダカ



が泳いでいて、キイトンボが何匹も飛びまわっていた。ショウリョウバッタやカマキリが見受けられたが、各種のトンボや蝶が飛来する由。春にはヒキガエルとアカガエルが産卵し、カエルになって陸に上がって行くという。樹木は植え込み当時の高木のほか、野鳥に運ばれた種からの実生の小木がいろいろあり、ヒカゲチョウの仲間が止まっていた。人が居るために鳴いていないが、離れたところからアブラゼミやミンミンの声が

(一時クマゼミの声も)聞こえた。

管理は先生と生徒の保護者(OBも多いとか)で構成するNPO法人センスオブアースが中心に水道水の補給や、高木の剪定などの手入れをしていて、校庭の芝生は常緑の西洋芝を混植してあり適宜刈り込み、生えてくる野草を小まめに除去(当日も作業中だった)して綺麗に保っているという。

ビオトープでは何処でも問題となる、アメリカザリガニは居ないという。校門を入れて奥まった場所でもあり、通りがかりに放り込まれるようなことがない立地条件に恵まれているためかと思う、羨ましいかぎりだ。

お聞きしたことを満足に書き表せないことをお詫びし、休校日は開放されているので是非見に行かれることをお勧めします。当日ご案内ほか大変お世話になったNPO法人理事長の寺田さんにお礼申し上げます。(猪鼻 昭二)

## 昭和23年頃の農村

### 私が育った千葉茂原の暮らし

トンボ池の水路の笹刈の後で、子供の頃肉桂の根っこを掘りに来た人が居たという話をしたことから当時の事を書くことになりました。よく覚えてない事もあり、お盆で生家へ集まった折に尋ねようにも戦後生まればかりで、年長者に尋ねると「忘れた」と言われてしまいました。

育った家(千葉県茂原)の周りは、純農村地帯で、三世代で独立前の人(祖父母の子供)が居る10人前後の所帯が多かった。我が家は父が昭和21年に復員して妹も生まれ6人家族になった。

昭和16年海軍飛行場の建設が始まり、飛行場の中心まで2km位で、敵機が焼夷弾を落とす燃え上がる炎が、すぐ側に見えて怖かったと母親が話していました。屋根の葺き替えの時に葉莢が沢山出て来たそうです。

山も川も無い平らな土地で山と言えば、杉林や松林の事でこの山は屋根の葺き替えに使う茅を取

ったり、燃料の確保にも大切な場でした。おもちゃや遊具が無かったので荒縄で縄跳びをしたり、縄を二重にして木の枝に掛けてブランコを作って貰うと、近所の仲間も毎日やってきて楽しく遊びました。このころ昭和23～5年には、いろいろな人が家々に回って来ました。一番怖がられた押し売り、なんとなく不気味な物乞いの人(こじきと呼んでいた)、付け木やマッチの軸に上手くイオウや火薬がついていないゴシャゴシャな塊を、筈1杯いくらで売る人、棕櫚(シュロ)の毛?を剥ぎ取って買って行く人。家では棕櫚は葉柄を長めに切り取って葉の部分を15～6cmに切り、麻紐などで編んで蠅叩きとして重宝していた。棕櫚の木は3本並んでいたの、植えたものと思う。棕櫚屋さんは自転車に木で作った踏み台と南京袋を積んで来て棕櫚の幹にぐるりと刃物を入れすばやく毛を剥ぎ取って何枚かずつ束にしていく。上の方は台に乗って作業をしていた。子供だったので高く見えたが3m位だったかな。来年蠅たたきを作る分は残るかな、と心配になった。当時は蠅が沢山いて蠅たたきは家の中に4つ・5つと、牛小屋にも置いていた。自給自足の時代、棕櫚は殆どの家で、屋敷の端っこに何本かは植えてあった。我が家で棕櫚の毛で縄をなっていたのを見たことは無い。棕櫚縄は田植えの時や畑の畝を造るなど、農作業で使っていたので村の雑貨やから買っていたようだ。

麻紐は、麻の木と呼んでいたが「からむし」「苧麻(ちよま)」と呼ぶのが一般的のようです。この草を秋の初め頃に親戚の小父さんが刈りに来て、その時は皆で葉を取るのを手伝った。自転車で積んで持って行き、芯を取り加工した樹皮(草丈の長さのまま)を持って来る。それを麻と呼んで用途に合わせて縋って使っていたが、加工の過程は全く分からない。

肉桂の根を売ってくれとか、地蜂の巣を探しているのであぜ道を掘らせて、というかわった人も来た事を思い出します。お祖父さんに聞くと「みんな生きて行く為に働いているのだ」と教えられた。肉桂は掘る時期で辛味が違う様で、毎年寒い頃に来た。肉桂やさんは太い根っこが欲しい様だが、お祖父さんは木の根元を掘ると木が枯れてしまう事を心配しているようで、話をよく聞かないで地面に印をつけると、「おめえら よーく見てくるよ。」と私たち子供に言って母屋へ行ってしまう。大きな穴を掘るのを近くによってももの珍しげに見ていた。肉桂の根はきれいに洗い、乾かして太さ別に赤いテープで括ってお祭りの屋台で売られていた。私たちが洗って乾かした物とは比べ物にならない輝きがあった。売値は残念ながら覚えていない。この木は幹周りが50cm以上あって近くにはシラカシやマキの木が植わっていたが、一部開けた方向に枝がぐいーっと伸びていて、そこにブランコを作ってもらった。人が植えたのか分からないが近所では珍しかった。口に入れても腹の足しにはならないが、根っこを分けると喜ばれた。

物乞いも決まって来るのは3人ほどいた。それぞれに特徴があって差し出した物は、なんでも持って行く人、自分の欲しいもの以外は手を出さないで頭を振る人、欲しいものを要求する者、この人たちも精一杯生きていたのだ。このときは分からなかったが戦争は絶対に興してはならない!

世の中落ち着いてくると植木を買う商人が来るようになった。生垣や畑の周りにイヌマキが植



えられているので、その木を買う人や庭木として出来ている木を探す人など。その一人に我が家の百日紅に目を留めた人がいて、どうしても手に入れたいようで、その時期になると（9月中旬頃？）4、5年通ってきて、稲刈りをしている田んぼで懇願していた。この木は、赤と白の花を咲かせる百日紅で、大きさが、子供が遊ぶのに格好の木であった。地上から1m位のところで二又になり、子供の腕くらいのほうが白い花、その何倍もある太い先には元気な赤い花が沢山咲いていました。木肌がツルツルなので腰掛けてるとひんやりとして気持ちよかったです。この頃は珍しいと思わなかったが、大人になって気が付いたのだが、咲き分けてる百日紅を見たことが無い。

4、5年も通ってきた植木屋さんの思いが分かった気がした。おじいさんは、婆さんが嫁に来る時持って来たので売る事はできないと断り続けた。（おばあさんはこの時は物故者。）本当かな？物好きな先祖が、悪戯をしたのかな？と思ったりしている。そう言えば父は柿の木を接木して美味しい柿の苗木を親戚や近所に配っていたし、挿し木をする事も好きだったなあ。今でも出かけると百日紅を見つめてしまう（石橋 しげ子）

## 赤塚トンボ池のこれから

トンボ池の水原は不動の滝の向かいから引いてきた湧水ですが、途中で漏水し、しばしば池が干上がるようになりました。区では来年度、水路補修等の予算化に動き出しました。池の改修にあたり、会ではトンボ池がビオトープであり、生物多様性を区民に理解してもらう大切な場所であることを区と再確認しました。1999年に池が完成した頃は、ビオトープという言葉もなじみがなく、アメリカザリガニが生態系を壊すという認識もありませんでした。今はどうでしょう？「ビオトープ」や「生態系」という言葉は十数年前よりだいぶ知られるようになりましたが、言葉だけで終わってしまうこともあるでしょう。それでも私達も池を見る人たちも「まちなかの自然」や、公園のあり方や自然について、少しずつ考え方が変わってきているように思えます。

不特定多数の人が訪れる場所なので、立ち入り禁止のフェンスは残ります。フェンス越しでも、まちなかの自然の大切さを感じられるよう、努力していきたいと思います。



湧水が漏れて池の水面が小さくなってしまったトンボ池。貧弱な水辺に批判的な声も届きます。ザリガニはあまり見かけなくなりました。ザリガニにとっては住みにくい環境らしい。トンボはしきりにやってきます。オタマジャクシやトンボのような小さな生きものには、干上がる危険性があってもこの程度の水たまりの方が安全らしい。今年はヤゴの調査をやってみたい。

5月の総会では、モッコクなどの植栽樹（公園の中なので庭木などが植えられている）を伐り、高く伸びたササを刈り、もう少し日が射し込む林縁にし、城址斜面林と一体となった林縁の自然地として管

理することに決まりました。隣の城址斜面林はどうなっているか下からのぞくと、高木の下にはアオキとシュロがびっしり茂っています。斜面下にある池の奥にアオキとアズマネザサとシュロが繁茂するのが自然です。そこを「人力」で、人の手の入った林縁として維持していくのです。自然とは手がかけられない場所と考えていましたが、なかなかどうして、まちなかの自然を認めてもらうには手がかけられます。

水路に生い茂ったササ等を刈ると、キツネノカミソリの花が目に入りました。キツネノカミソリのような野草は、せっせと下草を刈らなくても生きているし花もつけます。日暮台公園でも草の生い茂った林縁で咲いていました。清水山憩いの森を管理している大泉みどりの会の小泉さんも、「カタクリのためではなく、カタクリを見に来る人のために冬の下草刈りをする」と話されました。私達も観賞に堪えるようにササ等を刈ることになります。ピオトープの維持管理に賛同される方はぜひ参加して下さい(坂本 郁子)。

## 観察と活動の記録

**7月20日(土)** 水路清掃草刈 シュロや1m以上になったササなどの刈り取り。林縁の植物が育つように刈ったササ等は刈った場所に置かず除去することにした。

**7月27日(土)** トンボ池の作業。湧水の流入少ない。橋の右側はザリガニも見あらず、トンボが産卵している。左側にザリガニ数匹。浅いので姿が丸見え。池周りの草刈を実施。山側のササ・シュロ等を刈り、日当たりのよい広場側のクズを整理し、干上がったところに大繁茂したアメリカセンダングサを抜き取る。環境課に刈ったササ等の処分を依頼(写真上は水路、写真下は池まわり、下草刈で少し明るくなった。2日とも暑くて大汗を流した)。



写真左：水路にいたハグロトンボ(8月31日)

**8月24日(土)** バッタ広場昆虫調査 バッタ広場のクズ大繁茂

**8月31日(土)** バッタ広場クズ・ササ刈り。実をつけたガガイモ。

# 活動のお知らせ

**運営委員会**：9月28日(土) 10月26日(土) 12:30~13:30

作業・観察会の後にラーメンしらかばで報告や活動内容などを相談します。

連絡先；坂本(090-4618-1295)

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく**

日時：11月16日(土) 12:30~

**活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで**

## 活動予定いろいろ

### 1 赤塚ピオトープの観察と環境整備(雨天の場合は観察とゴミ拾い)

いずれもトンボ池前集合。

ササやクズも元気すぎて困りますが、やっかいな外来種(セイタカアワダチソウ、コセンダングサ、オオマツヨイグサ、ヨウシュヤマゴボウ)が種をつけ、ばらまかれるとさらにやっかいです。広い秋空の下、草刈(草抜き)に汗を流しましょう。

9月28日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等

10月19日(土) 10:00~12:00 バッタ広場のササ刈等

10月26日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等

(またはトンボ池・湧水水路)

11月16日(土) 未定

### 2 日暮台公園樹林地の観察プラス

(樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りなど)

10月5日(土) 11月2日(土) いずれも10:00~11:00 日暮台公園前集合

#### ピオトープ管理のボランティア大歓迎

生き物のすめる水辺(トンボ池)や草地(赤塚公園バッタ広場)などの管理作業を応援していただませんか。

大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったりしています。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)